徳洲会二次救命処置コース

TCLS受講者6000人突破

離島・へき地での開催にも意欲

TCLS（徳洲会二次救命処置）コースの受講者数が通算 6,000 人を突破した。7 月 4、5 日、名古屋徳洲会総合病院を会場に開催した第 216 回 TCLS 名古屋コースに 35 人が参加し、受講者総数が 6,027 人と大台に乗った。第 1 回を開催した 2002 年 9 月から約 24 年。これからも継続して心肺蘇生技術の普及に尽力していく。



6,000人は通過点。これからも心肺蘇生法の普及を継続

名古屋コースには名古屋病院に所属する歯科医師 1 人、研修医 7 人、歯科研修医 1 人、看護師 23 人、救急救命士 1 人と、グループ外の医療機関からも 2 人の看護師が受講した。

TCLS コースは、科学的根拠に基づいた心肺蘇生法の習得を目的として、徳洲会グループが主催。06 年からは日本救急医学会の認定 ICLS（心停止緊急救命処置）コースとして行っている。

参加者は講義や実技をとおして ACLS（二次救命処置）の概要、胸骨圧迫や AED（自動体外式除細動器）による CPR（心肺蘇生法）の手順・方法、気道確保、気管挿管、換気、心電図の見方、除細動器と心電図モニターの使用方法などを習得する。筆記試験と実技試験を行い、合格者に修了証を授与。グループ内で開催希望病院を募り、年間 10 回程度催している。

06 年 7 月に 1,000 人に到達後、09 年 11 月に 2,000 人、13 年 7 月に 3,000 人、16 年 10 月に 4,000 人、22 年 12 月に 5,000 人と、着実に修了者を輩出してきた。

今回、コースディレクターを務めた南部徳洲会病院（沖縄県）の清水徹郎・高気圧酸素治療部長兼救急診療科部長は「超規模、大規模病院では、すでに TCLS とは別に単独で ICLS を開催できる病院が増えてきています。受講者数の多寡が重要なのではなくて、TCLS は救急蘇生コースを独自開催ができない施設へのお手伝いとして、存在意義があると思っています。その意味では受講者数は少なくても、離島・へき地での開催も積極的に行っていきたいと考えています」と、離島・へき地を含め今後も広く心肺蘇生法の普及に向け意欲を見せる。

続けて、「急性期病院の統廃合が進むのは止めようのないトレンドだと思います。そうしたなかで、救急対応がすべての職員の協力の下、速やかにできるように、職種を超えて受講していただき、病院全体の“チームとしての蘇生の能力”を向上させることが、今後求められることになるでしょう」と指摘。


安藤みゆき循環器内科部長（左）から修了証を受け取る塚原研修医

「一方で離島・へき地では医師、看護師のマンパワーの問題がつねに存在します。地域の唯一の医療機関として病院のもつ“蘇生力”を向上させる意味は、都市部以上にあると思います」と離島・へき地での TCLS 開催の意義を強調する。

「CPA 対応や院内急変の際積極的にリーダーの役割を」

6,000 人目の修了者となったのは名古屋病院の塚原万葵研修医（1 年次）。修了証を受け取った塚原研修医は「教えて下さる先生方が、とても丁寧に説明やサポートをしてくださり、2 日間充実した研修になりました。これまでは心肺停止の患者さんが運ばれてきても、蘇生の手順を理解しておらず、上級医の指示どおりに動くことしかできませんでした。これからは、救急外来（ER）での CPA（心肺停止）患者対応時や、院内急変の際に、積極的にリーダーの役割を務められるように日々精進していきたいです」と意気込みを見せる。

また、名古屋コースのインストラクターを務めた石川雅・循環器内科医師は「受講生が楽しく受講できるように、また現場の小さな疑問を解消できるように指導しました。笑顔なども見られ、真剣に、また楽しく受講されているようで良かったです」と振り返り、「自院内での急変などの際はチームワークを発揮して、最速で最良の救命措置を行いたいです」と抱負を語った。

今回受講した他の研修医からも積極的な意見が多数聞かれた。「これまで自分にもできることをという姿勢で CPR に臨んでいましたが、今回の受講を機に、自信をもって行動できると感じました。今後に生かしたいと思います」、「大変有意義な講習でした。個人的に循環器系で急変した患者さんの対応には自信がありませんでしたが、今回の講習でそういったことを学べて良かったです」と、TCLS を受講し技術を習得したことで自信がついたという意見が複数上がっていた。

また、「ER 診療で CPA は頻回に経験するため、コメディカルと共通の目標・行動指針を共有しながら学ぶことができたのが、非常に有意義でした」と CPR もチーム医療のひとつであることを意識した感想も聞かれた。

さらに、今回習得した技術の活用に関し「まずは ER での CPA 患者さんの対応ができること。そして、より救命率が高いであろう院内 CPA で、真っ先にリーダーを担えることです」と前向きな声に加え、「これまでは病棟での急変時にドクターブルーで呼ばれた際、何をしていいのかわからず、まわりの指示に従うだけでしたが、今後は自信をもって行動したい」、「ER 診療やドクターブルーの際に積極的に診療に参加していきたい」と救命処置への積極的な参加の動機付けにもつながったようだ。

また、「ドクターブルーの際に何をすればいいか自信がなく、積極的に参加することができずにいました。今回、このような機会をいただき、対応の全体像を知ることができました。ここで得た知識をマスターして急変時対応に自信をもって取り組みたいです」といった声もあった。

「一刻も早い治療が必要」好評の脳卒中フォーラム

野崎病院 開催

野崎徳洲会病院（大阪府）は、大東市立総合文化センターで第6回脳卒中フォーラムを開催した。脳卒中とは脳の血管が障害される脳梗塞、脳出血、くも膜下出血の総称で、いずれも早期に治療しなければ命にかかわる可能性もあることから、同院では年1回、同フォーラムを開き、啓発活動を続けている。


田村院長は、野崎病院は頸動脈疾患の治療に実績があることをアピール

中川秀光総長（脳神経外科）が開会挨拶後、脳卒中の初期症状や予防法など解説した。まず、脳卒中の初期症状には字が書けない、うまく歩けない、身体の片側にまひやしびれが出る、ハンマーに殴られたような鋭い頭痛が走るなどがあると列挙。時間制限のある治療法が多く、一刻も早い治療が必要とされるなか、同院は常勤医9人体制で24時間、脳卒中の患者さんを受け入れていることなど紹介した。

中川総長は、「脳卒中を疑う症状があれば、当院から車でお迎えに上がりますので、すぐに電話してください」と呼びかけた。

田村雅一院長（脳神経外科）は頸動脈疾患の治療法を解説。頸動脈は首から脳につながっており、この血管に障害があると脳へのダメージも大きいことから、人工血管で補修したり、ステント（金属の網目状の筒）で補強したりする治療法が必要となる。これらの治療法は難易度が高く、実施には施設基準があるが、同院は月40～50件の脳外科手術を実施。その半数は頸動脈関連で、経験豊富であることをアピールした。

前田昌丈・脳神経外科医師は、血管内治療について動画など用い詳細に説明。さまざまな治療法が開発されてきているものの、「早期発見・治療ができたとしても、重篤な脳梗塞後に社会復帰できるのは半数程度の方です」と、予防に力を入れるよう訴えた。


聴診器で頸動脈雑音がないか確認する中川総長

その後は中川総長が脳卒中相談会、同院スタッフが介護相談会、野崎徳洲会メディカルフィットネスAwaiが筋肉量測定などを行い、参加者は思い思いに試していた。

生駒病院などが看護学生に就職説明会

「地元の病院の魅力を知って！」

生駒市立病院（奈良県）は、奈良公園近くの会場で看護学生対象の就職説明会を地域3病院と合同開催した。同県看護学校で学んだ学生たちが看護師資格取得後、県外で就職するケースが多いことから、地元の病院の魅力を知ってもらい、看護師不足に一石を投じたい考え。


看護師から病棟の雰囲気など確認する学生

この日は台風で雨が降るなか、32人の学生が参集。まず3病院がそれぞれの病院の特徴、魅力、雰囲気など紹介。生駒病院は宮原啓子看護部長が登壇し、クリニカルラダー（教育システム）や多科ローテーション教育、多職種連携の様子など、同院の強みをアピールした。

その後は、歓談形式で各院の看護師らが学生に勤務体系や病院の雰囲気など伝えた。参加した学生からは「（働いている看護師から）実際の病棟の雰囲気を聞けたのが良かった」、「希望の病棟に回してもらえるか確認できたのが大きい」といった声が聞かれ、この説明会をきっかけに病院見学や体験会への参加を決めた学生もいた。

同会を主導的に進めてきた生駒病院の山本恵美子主任（総務課事業推進室）は、「悪天候のなか、これだけの学生に集まっていただき、成功だと思います。また県内病院の連携強化にもつながったので継続していきたい」と笑みを浮かべ、今後の企画にも意欲を見せた。

コメディカル部門で初めて

日高病院が地元の高校生向け職業体験

日高徳洲会病院（北海道）は7月26日、地元の高校生25人を招き、医療職の体験イベントを開催した。将来の安定した人材確保が狙いだ。


合同職業体験で臨んだ（左から）田上未紗栄養士、今係長、二口南希・臨床工学技士、疋田千珠薬剤師、水谷薬局長

「当院は札幌市から車で2時間以上離れていることから、医療技術職の養成校が集まる都市部に進学した学生はUターンしにくい傾向にあります」と、運営に尽力した薬剤科の水谷雅子薬局長は、へき地でのリクルートの難しさを話す。そこで、従来は看護部のみ行っていた職業体験を、看護に比べ仕事内容が知られにくいコメディカル部門への関心を高めようと、薬剤、栄養、リハビリテーション、検査、臨床工学の5科が初めて合同で企画した。

薬剤科では、菓子を使った薬剤の一包化や軟膏をつくる体験、同院の特色である多種多様な漢方薬の紹介。栄養科は「普通の食事と腎臓病食は何が違うか」をクイズ形式で出題し、肉の量や低タンパク米などの違いを実物で示した。リハビリテーション科は理学・作業・言語の3療法を説明し、言語聴覚療法では、とろみ剤を加えた飲み物をつくって味わってもらう試みを取り入れた。検査科と臨床工学科は、学生同士で検査などを「する側」と「受ける側」の両方を体験してもらうなどした。

参加した高校生は「病院にはいろいろな職種があることを知りました」と話し、中心となって企画したリハビリテーション科の今礼子係長（言語聴覚士）は「当院で働きたいと思ってもらえたら」と期待を寄せていた。